

コラム ～先人の功績を訪ねて～

郷土を愛する女流作家

辻村 もと子

「文学への情熱と北海道の土の匂いが私を駆り立て、開拓者だった父の意志が作品を完成させてくれました。」

小説『馬追原野』で第一回樋口一葉賞を受賞した辻村もと子は志文（現在の岩見沢市志文町）が生んだ女流作家です。北海道に入植した父直四郎が苦労を重ねて開拓した広大な北海道の地で、快活な幼少期を過ごします。子ども時代に刻まれた志文での記憶が、もと子の文学を育む土壌となりました。

もと子は、函館の遺愛女学校を卒業し、東京にある日本女子大学校国文学部へ進学し、小説の創作活動に励みます。

やがて、もと子は、大きな病を患います。体調が不安定な日々の中、もと子の文学への情熱は、衰えることがなかったのです。自らの作品を次々と発表し、周囲の作家仲間が認めるほど、もと子は女流作家としての地位を高めていきました。

「今、私が書かなければならないこと、私が本当に書きたいものは、小さな頃見ていたあの北海道の風景だわ。父たちが苦労に苦労を重ねて開墾したあの大地の物語を私は書き上げたい。」

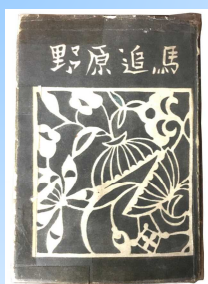
父を始めとする長沼の開拓者たちの姿を鮮明に描いた作品「馬追原野」は、「生きる勇気を与える作品である。」「北海道移民の貴き歴史を教示する作品である。」との高い評価を得ました。

もと子は、後にこのような言葉を残しています。「私は生まれた土地を愛する。この特殊な新しい歴史をもった土地が、よりよい発展の道をたどるようには、いつも絶えない私の念願である。」

私たちの郷土である北海道の発展を願うもと子の思いが、作品の中に込められているのです。



「辻村 もと子 氏」
〔辻村家（岩見沢市志文町蔵）〕



「馬追原野」



「馬追原野文学碑」

*樋口一葉賞：優れた女流作家に贈る

うと制定された賞

*入植：開拓などで移り住むこと